
戦艦『武蔵』 ～ 姉妹の運命～

伊東 棕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦艦『武蔵』 ～姉妹の運命～

【Nコード】

N1591U

【作者名】

伊東 棕

【あらすじ】

大艦巨砲主義の象徴として君臨した大和型戦艦『大和』と『武蔵』、彼女たち姉妹の定められた運命を描く。彼女たちの敵は、彼女たちが生きる時代そのものだった。固い絆に結ばれた二人の姉妹。しかし戦乱の波が二人に容赦無く襲いかかる。戦いの果てで、姉妹は何を知るのか。史上空前の戦いに、彼女たちは身を投じる

一 二号艦（前書き）

艦魂・神龍編シリーズ、久しぶりの外伝作です。

タイトルの通り、大和の妹である戦艦『武蔵』の艦魂、武蔵を

そして大和との、姉妹の二人を主軸に物語は紡がれます。

彼女たち姉妹の絆、戦い、その運命をご覧ください。

一 二号艦

まだ名前がない頃。彼女は二号艦と呼ばれていた。

世界最大の艦として生まれ、そびえ立つ黒い城の周囲を多くの機銃と高角砲を備え、海に浮かぶ要塞と化したその艦は、三六〇度どこから見ても戦艦。^{いくわらね}

壮大な迫力が満ち、艦が航走するたびに大きな白波が海面に立った。

二号艦は、己の武器と言えるべく巨大な砲身を掲げた。ゆっくりと旋回を始める。そして、その砲身の周囲、甲板の上には測定機が幾つか、さらにモルモットが入った檻が多数、置かれていた。

檻の中に閉じ込められたモルモットたちは、キィキィと鳴きながら、檻の中をちよろちよると動いていた。ある一匹は檻の柵をかじり、ある一匹は耳をぴくぴくさせながら、周囲から響き渡る音と振動に注意を向ける。

そんなモルモットたちが入った檻のそばに、スツと影が現れた。

キキ…と鳴くモルモットは、檻の中からその影をさす相手を、円^{つぶ}らな瞳で見上げた。

「…………ごめんね」

影の根に立つ一人の少女。彼女は一言、小さく呟いた。

モルモットが柵の間から鼻を覗かせ、くんくんと動かす。そして、目の前に立つ少女を見据えた時、異様な匂いを感じ取った。

それが、そのモルモットの最期の感覚だった。

次の瞬間、砲身から火を噴くと、たちまち火山の噴火に似た大音響と地震が艦全体に響き渡り、特に甲板上には、一瞬にして衝撃波が襲いかかった。

それは骨を軋ませ、内臓が喉元まで出てくるような、鼓膜がビリビリと破れる勢いで震えるような、そんな衝撃だった。

甲板上に多く置かれた檻の中に入っていたモルモットは全て、内

臓を露出させ、眼球を飛び立たせていた。

同じく甲板上に置かれていた測定機には、人体が到底堪えられることができないような数値が示されていた。

主砲発射の試験を終えた第二号艦は、軍港へと戻る舵を取った。

その上で、一人の少女は艦の中で、生前の面影を残さない無残なモルモットの死骸を見下ろした。

少女は無言のまま、艦が港に戻るまで、その場に立ち尽くしていた。

第二号艦はその後、全ての公式試験を終了した。今まで作業に従事していた作業員の姿も日に日に少なくなっていく。

一方で第三号艦が戦況に伴い、航空母艦への改造が決定した頃、第二号艦の名前が正式に決定し、その艦名が軍部内で広まろうとしていた。

第二号艦

名を、『武蔵^{むさし}』

世界最大の戦艦、日本が建造した最後の戦艦となる、戦艦『武蔵』が大日本帝国海軍に君臨した。

一 二号艦（後書き）

前々からご要望の声を頂いてはいたのですが、実現に随分と時間が経ってしまいました。その件に關しまして、お詫び申し上げます。

二 姉妹

時は昭和、世は乱世と言える大東亜戦争の真つただ中。

日本軍の真珠湾攻撃を機に開戦した大東亜戦争は緒戦、日本側の快進撃が続いていた。戦艦『大和』はこの戦争と同時に帝国海軍の戦艦として君臨した。しかしミッドウェー海戦を境に戦況は逆転。ガタルカナル島の撤退、太平洋各地の日本軍の玉砕により、日本は徐々に連合国軍に追い詰められ、戦況は決して芳しくなかった。

戦況は悪化し、彼女の仲間たちが消えていく中。

まだ世界に名を覇せた連合艦隊が健在だった頃。

戦争は激しさを増し、散っていく仲間たちが増える中、それでも彼女たちは懸命に生きていた。

そして、大和も

「ねえ、お姉ちゃん」

入道雲が伸びる蒼い空の下、すこし幼い少女の声が下りる。日本が生み出した世界最大の規模を誇る大和型戦艦の象徴とも云える四十六センチ主砲の上で、一人の少女が暖かい日の下で寝そべっている。豊満な二つの膨らみが目立つ、少女というよりは凜々しい顔立ちを持った美少女。寝転んで自慢のポニーテールを流した大和が、掛けられた声を聞いて瞼を開き、その漆黑に揺れる瞳を見せた。

「なんだ……武蔵か……」

自分の瞳を覗きこむ妹の表情を見た大和は、むくりと上半身を起き上がらせて言う。

「何か用か」

「もうっ。実の妹にその言い方はないんじゃない？」

「いや、これが私の常なのだが……」

大和の目の前でぷーっと頬を膨らます少女。くりつとした丸い瞳は純粹そのもので、頭は二つの丸い髪縛りでちょこんと丸め、背中の下まで綺麗な黒髪を流していた。服装は帝国海軍の第二種軍装そ

のものなのだが、その下は上の軍服に合わせた短いスカートを履いていて、白い太ももが艶やかだった。

「……お姉ちゃん、また鼻の下伸びてる」

「おっと、いかん。ジユルリ……」

「もう。実の妹にまで発情するなんて、それこそ本当の変態だよ？ お姉ちゃん」

「実の妹に変態呼ばわりされるとは……、それでも私は帝国海軍随一の大戦艦、世界一の超弩級戦艦『大和』だぞ」

威張るように、ただでさえ大きな胸をえっへんと、更に強調するように張った。

そんな大和（の胸）を、ジトッとした恨めしい瞳で見詰める武蔵。

「自画自賛……全国の大和さんに謝ったほうがいいよ」

「酷い言われ様だな……」

さすがに大和も落ち込むように、少しシユンとなる。

武蔵はそんな落ち込んでいる姉を見て、クスリと吹いてしまう。

「あはは、嘘嘘。冗談だよ、お姉ちゃん」

「いや……本気にしか聞こえなかったのだが？」

くすくすと楽しそうに笑う武蔵と、仕方ないという風に嘆息を吐く大和。

それはどこから見ても、仲の良い姉妹の風景であった。

日本の造船技術の粋を集集させ、大艦巨砲主義の最高潮の上に誕生した史上最大の戦艦、大和型戦艦 戦艦『大和』。そして、姉妹艦の『武蔵』。

二人は帝国海軍が託す最大の切り札であり、そして国宝だった。昭和十八（一九四三）年二月十二日に戦艦『大和』から連合艦隊旗艦の座が移され、『武蔵』は連合艦隊旗艦の座を姉妹艦である『大和』から引き継いだ。

そんな世界一を誇る大和型姉妹の艦魂は、姉の大和はかつては連

合艦隊旗艦を経験し、今では妹の武蔵にその座を譲っているが、以前から変わらず周囲から「長官」として認識されている風格を持つ男にも勝るクールな雰囲気を持ち主だが、反面、可愛いものに目がない。可愛いものなら男でも女でもかまわないという危ない主義。しかし彼女は常に姉妹や仲間を想う、そして勇ましく頼もしい性格の持ち主でもある。

だから、長官を引退した今でも彼女たちから「長官」と言われて慕われているのだ。

妹　武蔵は大和とは似てないと周囲に言われている。幼い仕事草から、同性である彼女たちの人気者であり、皆のマスコットの、あるいは癒しのような存在だ。姉より常識派で、反面子供のような残酷さも兼ね揃えているが、姉想いの優しい少女でもある。

「……で。姉の昼寝を邪魔して、どういう用件だ？」

「お姉ちゃんはお昼でも寝ていられるけど、私はお姉ちゃんと違って忙しい身なんだよ。あー、職を持つ人は忙しい忙しい」

「なんだそのまるで私が無職みたいな言い方は。確かに私は武蔵に司令長官の座を譲ったが、だからといって私も暇ではないぞ」

「こんなところで昼寝してるくせに？」

「ぐ……、戦士にも時には休息が必要だ」

「ぶーっ」

「ふてくされるな。なんだ、私に愛でられたいのか？」

ニヤリと笑って大和は言う。

大和は可愛いものなら性別だって区別しないのだ。それは姉妹の垣根さえ超えてしまうほどでもあることは、武蔵が大和のもとにやってきたことによって既に証明済みである。

「そうだねー」

「なっ?!」

武蔵の予想外の反応に、大和は目を丸くした。

「ここのところ忙しかったからねえ。昨日だって徹夜して、全然寝てないんだよ。あは、司令長官って大変なんだね。でもお

姉ちゃんもずっと司令長官やってたんだもんね。私、お姉ちゃんを見習いたいよ……」

「武蔵……」

「だから、久しぶりに大好きなお姉ちゃんに……別に可愛がられてもいいかなというか……私が、甘えたいなあ……なんて、ね？えへへ……」

そう言つて、武蔵は照れくさそうに天使の微笑みを浮かべながら、頬を朱色に染めて頭をぼりぼりと掻いた。

そんな妹を見て、大和は目元が熱くなるのを感じた。

そして、同時に頬がみるみる朱色に染まっていく。

「……良し」

大和はフツと微笑むと、コクリと頷いた。

「お姉ちゃん……？」

「思う存分この姉に甘えてくれ、我が妹よっ！私のたった一人の妹よ……ッ！！」

「わっぷッ?!」

ムギユツと大和に抱き締められた武蔵は、姉の豊満な胸の中に顔を埋める羽目になった。

「うっ、お姉ちゃん苦しいよ」

「ああ、可愛いなあ我が妹よ」

武蔵をギユツと抱き締めた大和はさらに頬をすりすりと優しくすり寄せた。武蔵は「もうっ」と言つても、その頬を赤らめた表情は幸せそうだった。

散々大和に愛でられた武蔵は、一つのお願いを姉に申し出た。

「……ねえ、お姉ちゃん」

「ん？なんだ、妹よ」

「ひとつ、お願いがあるんだ」

「おお、聞いてやる」

自分の二つの双丘から上目づかいで見詰めてきた武蔵に、また鼻の下を伸ばした大和はまた愛でたい衝動に駆られるが、妹の願いを

聞き届けるためにぐっとこれを抑えた。

しかし大和が武蔵を愛でたい衝動を耐えた末に聞いた妹の願い事は、大和を震撼させるのに十分なものだった。

「……歌、唄って」

「……………」

その瞬間、笑顔のまま、大和は石のようにピシリと固まった。そして長い沈黙の後、動かなくなった姉を不思議に思って首を傾げ、覗き込んできた武蔵の「お姉ちゃん……？」という呼びかけで、我に帰る大和だったが、その次はダラダラと大量の汗を滝のように流していった。そして、自分をどうにか落ち着かせようと努めた大和は、ようやく口端を引きつらせながらも、妹に問いかけた。

「妹よ……歌とは、どういう意味かな……………」

「お姉ちゃん、歌上手じゃん。私、聴きたいな」

「……ちよつと待て。何故」

顔を青くした次は、今度は顔を紅潮させる大和。

「何故……私の歌のことを知っている」

顔を赤くする姉の顔を見て、武蔵は可笑しくてクスクスと微笑んだ。

「お姉ちゃん、私を誰だと思ってるの？ お姉ちゃんの妹だよ？ それくらい知ってるよ」

「なん……だと……………」

いつの間にか、顔を真っ赤にした大和の身体から、武蔵は解放されていた。武蔵はしばらく、姉の変貌した姿を楽しむようにじつくりと観察していった。

「（お姉ちゃん、可愛いなあ）」

顔を赤くして押し黙る大和を見詰めながら、武蔵はそんな感想をニコニコとした笑顔の内側で密かに抱いていた。

そして再び動かなくなった大和に対して、武蔵はそのまま首を傾げて、子供が強請^{ねだ}るように言った。

「ダメ？」

「く…ッ」

現在の帝国海軍の中で、武蔵以外で知っている者は余りに少ないが、大和は歌が上手い。

大和自身はそれを恥ずかしがっているため、人前では決して歌わない。むしろその事実さえ秘密にしていた。何事もクールで完璧超人として他人に尊敬されている大和の意外な一面である。しかし妹である武蔵は知っていた。ある時、大和が一人唄っているところを、姉が楽しそうに唄っているところを、姉のもう一つの顔を。そしてその歌に聴き入っていた自分を、武蔵は覚えている。

丸い目を潤ませる武蔵に、遂に折れた大和は、がっくりと肩を落とした。

「……わかった」

「お姉ちゃん？」

「……唄ってやる。私が」

「本当ッ!？」

武蔵はパアツと太陽のように表情を輝かせた。キラキラと輝く、そのくりつとした丸い瞳に、大和は頬を赤くする。大和は一度咳ばらいしてから、「本当だ」と返した。

「よし、こうなったらやってやろうじゃないか。喜べ、武蔵!」

「わーいッ!」

最早大和は開き直ることにしていた。目の前で純粹に喜んでいる妹を見てしまつては、やらないわけにもいかなかった。

「よし、喜んでるな。ではなにを唄おう。やはり軍艦行進曲か! それとも海ゆかば、いや、君が代か? 月火水木金金、同期の櫻も捨てがたし!」

「もう…! お姉ちゃんの唄うものならなんでも良いんだけど…でも、私はあの時聴いた歌が良いな」

「……あの時聴いた歌？」

「うん。ほら、あの……さくらさくら」

武蔵は記憶を掘り起こして唄い出す。大和はすぐにピンと来て、

頷いた。

「ああ、そうか。それを聴いたのだな……」

「うん。あれ、私大好き」

「そうか。ではそれにしようか」

「うん！」

大和は立ち上がる。チラと妹のほうを見ると、武蔵はわくわくと待ち望んでいる。大和は照れくさそうに、そして息を吸うと、透きとおるような歌を紡ぎ始めた。

さくら さくら

野山も里も

見わたす限り

かすみか雲か

朝日におう

さくら さくら

花ざかり

武蔵は歌う姉の姿を見て、そして気付いた。

胸に手を当て、歌を唄う大和の背景に、舞い散る桜の光景がはつきりと、武蔵には見えた。

武蔵は目を閉じて、姉の歌声を聴いた。

姉はすこし照れくさそうにしているも、凜と通った声が、歌を紡ぎ、妹の心を優しく癒してくれていた。

司令長官としての忙しい仕事も、その根本となる戦争も、嫌なこともすべて忘れさせてくれるかのような歌声。

その時間、その瞬間が何より、武蔵にとっては幸せな刻^{とき}だった。

「ど、どうだ……」

「うんっ！ とても良かったよ、お姉ちゃん」

「そ、そうか。それは良かった……」

緊張が解けたように、ホッと一息つく大和。

武蔵はまだニコニコとされていて、そしてなにか閃いたかのようにパンと手を叩いた。

「そうだ！ お姉ちゃんの歌声をもっと多くの人に聴いてもらおうよっ！」

「……な、に……？」

大和の顔がサーツと青くなる。

妹ならまだしも、他人に自分のこんな一面がバレてしまうのは、耐えられない羞恥だ。

「今なお長官」と呼ばれて親しまれている自分に、こんな一面は尊厳に関わる。

自分のクールなイメージ（自称）が、乙女チックに染まってしまう……！

「うん！ それがいい！ と、いうことでえ〜」

「ま、待て……ッ！」

大和が止める前に、次の瞬間には武蔵は主砲の上から飛び出していた。

「お姉ちゃんの歌を聴いてもらうためにも、みんなを誘ってくるねっ！」

「ま、ま、待てえええつつっ……！」

悲鳴に近い声で叫んだ大和は、素早い足で行ってしまう妹の後を慌てて追った。自分の尊厳とイメージを死守するため、大和は走りゆく妹を必死に追いかけたのだった。

今の『大和』のマストには既に大将旗は掲げられていない。それは既に妹に譲り、今は妹の身にその旗が翻っているから。

戦艦『武蔵』のマストにはためく大将旗。それは連合艦隊旗艦の証を示している。

日本帝国海軍の世界を相手に戦う連合艦隊の旗艦としての風格が『大和』に劣らず表れているはずの『武蔵』だったが、実の正体は、絶賛姉に追いかけられ中の少女であった。

「くそ……武蔵め、どこへ行った……」

『武蔵』に降り立った大和だったが、妹の姿はどこにもない。本体である艦に戻ったと思った大和だったが、見当違いだったのだろうか。

「いや、間違いない。私の可愛電探^{ラフリー}がびんびんに反応しているからな……」

等とわけのわからない自信を持ちながら、大和は『武蔵』の艦内での搜索を始めた。

艦首から艦尾まで二三〇メートルの全長を誇り、城の如く聳え立つ艦橋も合わせると、艦内の広さは新米の乗員が迷子になる程に広い。そんな世界最大級の戦艦の艦内で人探しとは無謀と言う他ないのは、自分自身がその世界最大の戦艦として大和が一番よく理解しているはずだが、是が非でも武蔵を捜し出す必要があった。

「どこだ。出てこい、武蔵いいツツ……」

あらゆる所を探し回る大和だったが、目的の妹の姿はどこにも見当たらない。

「……くそ、何だこの無駄な広さは。我ながら恐ろしいが……何故こんな馬鹿でかい構造にしてるんだ……何を考えているのか理解できないな、人間と言うのは……世界最大がどうか知らないが、何でもかければ良いと言うものではないぞ……私は大きい方も好きだけどな……将来性が見える小さい方も大好きだがな……ツ！」

激しく自分の存在をも乏しめるようなことを全弁開放する大和だったが、それに指摘する者は誰一人いなかった。

「……ここまで言っても、武蔵がツツコミに現れないとは。やはり自力で捜し出すしかあるまい……」

と、気を取り直して行こうとした大和の視界に、一人の少女が横切ったのを大和は見逃さなかった。ふらふらと通りかかっている彼

女を見つけると、大和は口端をにやりと吊り上げた。

「……見つけたぞ」

そう言うと、大和は何も知らずに一人通路を歩いている彼女のそばに向かつて一瞬で転移した。

「おい、山城」

「……………」

大和の声にゆっくりと振り返ったのは、いつも眠たそうな顔をしている山城だった。彼女は帝国海軍の戦艦の中でも老嬢と言える程の現役を続けている戦艦『山城』の艦魂なのだが、いつも重たそうな臉を抱えて過ごしている。いつも眠ってしまいそうな表情をしているので、流れるような美しい黒髪と華奢に整った小さな顔が勿体ない。

だが、彼女は武蔵と最も仲が良い艦魂としても知られている。艦魂の間に歳の差と言うのは親交の上で大した障害でもないのだが、それにしても二人の仲の良さは親友も同然だった。

「率直に聞こう。山城よ、妹を見かけなかったか？」

「……………」

「……起きているか？」

「……………」

こつくり、こつくりと顔を落とす山城の意識は、完全に覚醒しているのかは非常に疑わしかった。

山城は武蔵と仲が良いのはそうなのだが、こうして寝ぼけて武蔵の所に訪れるのも珍しいことではない、と言うのは大和も聞いたことがあった。主に武蔵や、山城の寝ぼけ癖に困った扶桑から。

「……ふむ」

大和はジッと、目の前で今にも眠ってしまいそうな山城を見据える。大和の瞳が、真剣に細められる。

「……………」

重そうな臉が閉じられそうになるが、山城はゆっくりと首を横に振った。

「そうか、見かけていないか……」

眠そうにしながらも、山城はとりあえず受け応えはして見せた。山城は再び、こっくりこっくりと眠たそうに顔を落とす。

「……山城、少しはその癖治した方が良い。武蔵や扶桑に、あまり心配は掛けさせたくないだろう？」

「……………」

聞こえているかどうかわからない山城を見詰め、大和は小さく溜息を吐いた。

「引き止めて悪かったな。ちゃんと帰って寝るんだぞ」

「……………」

眠たそうにしている山城は、大和の言葉に頷いているように見えた。

それを認めて、大和は踵を返す。

「絶対に武蔵を見つけないければ……既に他の者たちにばらしていなければ良いが」

ここで無駄に時間を食ってしまった。ここには多くの艦艇が停泊している。早く、他を当たらなければ……！

そう言い残し、大和は早足でその場から立ち去った。そこに残されたのは、一人立つ山城だけだった。

と、その途端に。

「お姉ちゃん、行っただね」

「……………」

壁からすり抜けるように現れた武蔵の姿に、山城がゆっくりと振り返る。

「……………」

どこから現れてるの？という意思を山城の表情から読み取った武蔵は、はにかんで答えた。

「いや、私、艦魂じゃない。自分の艦なら自由に姿をどこにで現せることが出来るわけだから、ちょっと趣向をこらして実践してみました。仕掛けの種はね、かすかに転移の光を壁に貼りつ

けるように浮かばせて、そこからゆつくりと、壁から出てきたように身体を浮かばせて……」

「……………」
眠たそうな顔だが、呆れて深い溜息を吐いているように見えるのは気の所為だろうか。

「お姉ちゃん、私を捜してた……？」

「……………」
武蔵の問いかけに、山城はコクリと頷く。

「……………」
山城の眠たそうな顔が、よくあの大和から逃げ切れてるな、と語りかけた。

「ふふふ、日々お姉ちゃん対策は密かに仕込んでいたからね。
余裕余裕」

「……………」
この姉妹は不思議で飽きない、と山城は落ちてしまいそうな意識の中で思った。

で、そこまでして何故大和から逃げているの？と、山城の表情が無言に語りかける。

「ふふ、実はね。 お姉ちゃんのことです」

「……………」

武蔵が遂に、姉の秘密を明かそうとした。
その時

「そうはさせるかああああッッッ！！」

どこからともなく、響き渡った大和の声に、二人（さすがの山城も含めて）はビクツと肩を震わせた。

そして二人を引き離すように、真上から日本刀の刃が振り下ろされた。二人を遠く離すように、勢い良く二人の間を日本刀が空気を斬り付けた。と、思いきや、日本刀を手に持った大和が綺麗な着地

を見せ、降り立った姿を二人の前に見せた。

膝を付き、刀を静かに構えた大和が、猫のような鋭い瞳を二人に向ける。

「……見つけたぞ、武蔵」

「お、お姉ちゃん……」

突然の姉登場に、武蔵も戸惑っていた。まさか巻いたと思っていた姉の登場に、武蔵はただ動揺するばかりだった。

「ど、どうして……！ 気付かれていないはず……ッ！」

「ふ、愚か者。この私の前から逃げられると思ったか、我が妹よ。まだまだ私には到底及ばぬくせにな」

「く……ッ！」

じりじりと対峙する二人の姉妹だが、一人蚊帳の外に立たされる者が約一名。

「……………」

だが二人の超弩級姉妹の間に仲介に入ろう等とは一切考えず、山城はただその眠たそうな瞳で姉妹の成り行きを見守るだけだった。

「さあ、観念しろ。ここで大人しく投降すれば、今日は朝まで

一晩中愛で倒すだけで勘弁してやろう」

「ふふ、それは私としても悪くないね……でも」

武蔵の機敏な動きに、大和はいち早く反応する。

「悪いけど、お姉ちゃんに大人しく捕まるほど馬鹿じゃないよ……ッ！」

「ふ、それこそ我が妹。『大和』の妹にふさわしいッ！」

武蔵が地を足で蹴るように飛び出し、それに真正面から応えるように、大和も刀を構えて突貫するかの如く勢いで駆け出す。

あまりやりたくはないと思っていたが、少し強引ではあるが武蔵を気絶させて連れ去るという手段もやむなしと、大和はこの時考慮していた。大和が構えた刀の底を、すれ違い様に武蔵の後頭部に軽く当てようかと身を翔けるが

「…………ッ!？」

大和はそんなことをするはずもなく、武蔵の脇を通り過ぎようとした。だが、それを武蔵は許さなかった。武蔵はそのまま正面から向かってきた大和を、捕まえるようにして飛び込んだ。

身体全体で飛び込んできた武蔵の身体を受け止めることができずに、大和は飛び込んできた武蔵と一緒に倒れてしまった。その近くに大和の手から離れた日本刀がカシャーンと音を立てて落ちた。

「えへへ、私、お姉ちゃんのことならなんでもお見通し。やっぱりお姉ちゃんは優しいね」

「……………」

頭の中では強引な手段も考えてはいたが、武蔵が少しでも傷つくことなら、それは絶対実行されることはない。それは、大和にとっては姉としても当然のことだった。

倒れた大和に抱きつく武蔵。武蔵はさっきの仮面も簡単に外して、いつもの表情に戻っていた。ニコニコと笑いながら、姉の柔らかい身体に抱きつく姿は、妹というよりはまるで子供のようだった。

「…………ふ」

微かに噴き出した大和は、クールに微笑みながら、そっと武蔵の頭を撫でた。

「手のかかる仕方のない妹だな、お前は……………」

そう言っただけで妹の頭を撫でる大和はいつものように凜々しい微笑を浮かべ、そして撫でられる武蔵もまた、いつものように姉に甘える妹の嬉しそうな表情で、幸せそうな笑みをいつまでも浮かべていた。

「さつきも言っただけ、お姉ちゃんのことなら、私はなんでもわかるもん。だって、私はお姉ちゃんの妹だから」

「負けたよ、本当に……………」

大和は呆れるように、苦笑して嘆息を吐いた。

「でもね、お姉ちゃんのお秘密はばらさないよ」

「え……………」

近くにいる山城に聞こえないように、そっと耳元で囁いた妹の言

葉に、大和はきよとなる。

「今日から、これはお姉ちゃんと私の二人の秘密」

そう言つて、武蔵は「ねっ」と、指を口元に当ててにっこりと天使の微笑みを浮かべた。

大和はそんな妹のどうしようもないほど純粹な笑顔を見て、くっ…ッとし可笑しそうに笑つて、そつと武蔵の頬を撫でた。

「また、聴かせてね」

武蔵の言葉に、大和は苦笑を浮かべるしかない。

「本当に仕方のない妹だ……」

妹にはいつまで経つても敵わない。

大和が唯一敵わない存在、そしてかけがえの無い大切な存在の前に、大和はそれを再確認したのだった。

そして、それから大和は妹の頼みあらば、歌を唄うことも珍しくなかった。

それは姉妹二人だけの、秘密の時間でもあった。

二 姉妹（後書き）

大和と武蔵は、とても仲が良い姉妹です。

三 意志（前書き）

レイテ沖海戦です。

戦いの中で宿す、大和と武蔵の意志。

彼女たちは如何にして、どんな意志を抱いて戦いに赴くのか。そんな二人のそれぞれの意志を書いてみたいと思います。

三 意志

朝日が昇ってから静かだった湾内に、けたましい音が響き渡る。まず、静寂に身を置きながら紺碧の海に漂っていた各艦艇の揚錨機が音を立てて錨を揚げる。水しぶきをあげながら、錨鎖が巻き上げられていく。

艦の頭脳とも言える艦橋と、その手足となる各部との間に配置等の命令が交叉する。彼ら兵員たちの走り回る靴音の内に、毅然とした統率と秩序正しい動きが見て取れた。

時は昭和十九（一九四四）年十月二十二日、午前八時。曇り空の下で港を出港する日本帝国海軍大艦隊の雄姿がそこにあった。

艦隊司令長官、栗田健男中将の座乗する第二艦隊の旗艦『愛宕』のマスストに出撃を告げる旗流信号が掲げられる。それを見た将兵たちは自分たちに待ち受ける至難に対し、決意にも悲壮感にも似た意志を固くした。各艦艇の錨が完全に揚げられ、各系統のバルブが開き、艦を動かす様々な原動力が蒸気タービンに送られ、スクリューが息巻くように海中を掻き回す。出撃ラッパが勇ましく流れる中、まるで並び立つ山脈のような巨艦群がゆつくりと動き出した。

先導を往くのは第二水雷戦隊旗艦の軽巡『能代』をはじめとして、駆逐艦八隻が軽やかに白波を立てながら海面を滑り往く。司令長官を乗せた『愛宕』を基幹とした重巡第四戦隊、その後を『妙高』、『羽黒』の重巡第五戦隊。そしてその更に後ろを山脈の中の高山が続く。艦隊の主力と言っても差し違えない戦艦『大和』、『武蔵』、日本国民に最も慕われている戦艦『長門』の三隻の巨艦が往く第一戦隊が進む。

ブルネイ湾を出港した栗田艦隊第一部隊は単縦陣を以て航海を始めた。その先頭を行く『能代』の艦首が右舷側へと回頭する。その先には　　レイテ湾がある。

帝国海軍史上最大の作戦とも呼べる今回の作戦に先んじて出撃し

ていった第一、第二部隊を、戦艦『扶桑』『山城』を基幹とする第三部隊が登舷礼を以て見送った。

本作戦の計画は、まず先に出撃した栗田艦隊がレイテ湾を目指して一二〇〇海里という航程を進む。速力の劣る第三部隊、西村艦隊はその後を続く形となり、北方航路を取る栗田艦隊とは相反して南方航路八〇〇海里を突破する。そしてこの二つの艦隊によって敵輸送船団が存在するレイテ湾に突撃する。

それまでのしばしの別れ、将兵たち　そして、彼女たちはお互いの武運を、どこまでも広がる、戦場になるだろう海に強く祈るのだった。

湾に留まる第三部隊の面々に見送られた武蔵は、寂しそうな瞳を逸らした。無事では済まないだろうとい大作戦を前に、扶桑や山城たちと別れるのも惜しいが、いつまでもそんな甘い感情を持つことは許されないのは充分に武蔵は理解していた。

その証拠に、武蔵はそんな理解を自分に言い聞かせるように、額に白鉢巻を巻いていた。初めて書き、巻いた鉢巻だ。その鉢巻の白い布地には、日の丸を中心にして『必勝』と、武蔵自身が書いたとは思えないような強い意志で殴るように書かれていた。

武蔵は今後の戦いが如何に激しくなるのかは充分に予想できていた。司令部から聞いた情報では、ボルネオ全島に出撃できる飛行機は一桁に等しい。つまり空の護衛は皆無に等しい。洋上戦力のみの大行進を実施しなければならなのである。間違はなく、想像以上の死闘が展開されるに違いない。その思いは作戦に参加する全将兵の共通の思いであつたし、その現実から帯びた将兵たちの悲壮感に似た興奮を、武蔵は文字通りに近い意味合いで肌にひしひしと感じ取っていた。

「武蔵、身体の調子はどうだ」
降りかかった声に、武蔵は鉢巻の尾を翻しながら振り返った。武

蔵の川のように流れる黒い長髪と共に、鉢巻の白い尾が靡く。それを見た大和の瞳が、一瞬だけ揺れたように見えた。

「見ての通り、万全だよ。こんな大事な時だから、しっかりしないといけないしね」

いつもの雰囲気にも努めるように、武蔵ははにかむように言った。そんな妹に対し、大和は何も言わないように、静かに微笑を浮かべた。

「そうだな。我々が作戦の要とも言えるのだから、満身を以て事に励まねば、皆に申し訳ない」

空の護衛がない中で、大艦隊の主力と言える大和型戦艦の二艦は、自身、二人が思う以上に作戦の成否を握る鍵であり、日本と言う国家の運命をも左右するのである。

比島を奪われれば、日本は南方資源地帯との連絡路を寸断されることになる。それは日本の生命線を断たれるのに等しい最悪の結果だ。

何としてでも、敵を撃破して作戦を成功せねばならなかった。日本と言う国家の命と引き換えに、連合艦隊の死を招く結果になろうとも。

「……みんなの、ためにも」

“皆”と言う大和の発言に対し、武蔵は噛み締めるように呟いた。皆が皆、身を削り、戦いに励んでいる。それがこの戦争だった。

米英を中心とした連合国に追い詰められた日本が国家の生死を賭けて始めた戦争は、ミッドウエーの敗北を機に悪化する戦況にただ太刀打ちできずにいた。

国民総動員によるこの戦争は、残念ながら日本にとってかなり最悪なものに成り果てている。このままでは国民や軍人の努力空しく、日本は米英に蹂躪されることになるだろう。それだけは、あってはならない。

そしてこの作戦もまた、連合艦隊の総力が投入されていた。正に連合艦隊の命運をも賭けた作戦である。

『大和』『武蔵』の栗田艦隊が進みつつある方向からほぼ北東方面の海域には、いずれ小沢治三郎中将の指揮する機動部隊（第三艦隊）が、栗田艦隊と反航し、フィリピン諸島に向かって南下する計画である。その目的は、フィリピン近海にある米機動部隊に発見された後、これを遙か北方に引き寄せる。つまり、“囷”であった。

その機動部隊に加わる四隻の空母には計一〇八機の艦載機が搭載されている。米機動部隊の目を引くために用意した機体だったが、実を言うとこれ自体が、日本に残された母艦航空部隊の総力なのである。開戦以来、太平洋の空を駆け巡ったベテランの搭乗員たちは既にこれまでの戦いで消耗し、補充のままならないままに、やっと発着艦のできる搭乗員までも、今度の作戦に投入せねばならない。

艦載機も旧式が含まれ、徹底的な戦いになったとしても、期待を寄せられるようなものでは決してなかった。正に、それもまた大きな賭けだった。

「私たちのために囷になってくれる第三艦隊のみんな、そして後続する扶桑さんや山城さんたちの第三部隊……私たちは、作戦に参加するみんなの期待を背負っている。そうだよ、お姉ちゃん」
そう言つて、向けられた武蔵の瞳には、大きなプレッシャーを受け、それに応えようという決意の表れにも、重圧に今にも押しつぶされそうにも見えた。

大和は武蔵の瞳を見詰め、息を吐いた。

揺さぶられるような感情を抱いているのは、何も武蔵だけではない。大和もまた同じだった。武蔵の目には、大和は毅然とする戦士の姉に見えていたが、大和もまた大きな自信を持っているわけではない。むしろ動揺や不安さえあった。

正確に言えば、私は戦士ではない　　まだ、この主砲を敵に一矢も報いたことさえないのだ。

大和は心中で自嘲するように笑った。その表れかどうか知らないが、大和の表情にも若干の笑みがこぼれた。

「あまり思いつめるのは良くないぞ。その事に重圧を感じるの

は自然の摂理だが、それで調子を崩しては元も子もないからな」

「お姉ちゃんも緊張とか、するの？」

武蔵はきょとんとした表情と声色で言ったものだから、大和はくつと吹き出した。

「それはどういう意味かな、武蔵」

はっはっはっ、と豪快に笑った大和を前にして、武蔵はまた驚いたように目を見開いた。そして今度は恥ずかしそうに顔を赤くする。

「私だって緊張するし、不安も感じる」

大和の発言に武蔵は驚きを隠せないようだった。武蔵は大和のことを、どこにいても自慢の姉として武蔵自身の中で確立していたのだから、その衝撃は大きかった。

「何せ私はまともに刃を交えたことさえないのだ。そんな私が、実戦においても完璧超人だと思っただか？」

武蔵は何も言えなかった。その顔がしゅんとなる。

「こんな私で、幻滅したか？　だが、これが私なんだよ」

大和は息を一つ吐きながら、そう言った。

だが、武蔵は即座に首を横に振った。

「幻滅なんか、してない。お姉ちゃんが自慢のお姉ちゃんであることは、変わらないから」

武蔵の中の姉は、依然として変わらないようだ。むしろ大和の本当の気持ちを知らなくて、武蔵は新たな決意を抱ききつかけを手に入れた。

そんな妹を前にして、大和は安心したように微笑んだ。

「だから、私や武蔵だけではないんだよ。皆が皆、様々な思いを抱いてここにいる。それを、覚えておいてくれ、武蔵」

「うん」

頷く武蔵の表情には、既に何かを取り払われたような感があった。生還は期さない、とまで言われた出撃に、赴く者たちの様々な思いが随伴していた。それは艦に乗る将兵だけでなく、彼女たち自身もそれは同じだった。どんなに大きく見えても、その実は年端もい

かない無垢な少女のように、如何に雄大でもその内に秘められる意志は決して一筋ではないのだ。

二十三日午前零時十六分、栗田艦隊が出撃して日付が変わった頃である。パトロール中だった米潜水艦『ダーター』がレーダーで多数の艦船を捉えた。四十分後、目標が大型艦十一隻を中心とする日本艦隊であることが判明すると、『ダーター』は僚艦と共に日本艦隊発見の緊急報告を打電。夜明けまでに二通の接敵報告が行われた。それは、猛将ハルゼー大將が日本艦隊について知った最初の情報になった。こうして日本艦隊の存在が米軍に明るみとなり、戦端の火蓋は切って落とされることになった。

この敵潜水艦の存在を、栗田艦隊も把握していた。『愛宕』がその潜水艦の電波を捉えていたのである。だが、自分たちが現在航行しているのは狭い水道であり、高速で敵潜を振り切るには不利な条件化である。艦影が見えるようになる夜明けの攻撃を懸念し、栗田中將は全艦隊に警戒を厳にするように下令した。

戦艦『武蔵』もまた、他の艦艇同様に不気味なほどに静かにうねる海面を睥んだ。既に夜は明け、自分たちの姿は丸見えのはずである。巨艦である『武蔵』が魚雷を何本受けたところで簡単に沈みやしないが、他の駆逐艦などの艦艇となれば、一発でも魚雷をまともに受けたらお終いである。全艦隊に初めて、実戦に生じる緊張が走った。

鉢巻を巻いた武蔵も、その丸い瞳を鋭くして、酔ってしまいそうになる程に目を海面の隅々まで見渡した。ぴんと張り詰めた緊張の糸がいつまでも続く。海中に潜み、水上からは見えない敵潜水艦の恐怖に、武蔵は首筋に冷や汗を感じていた。

そして武蔵はその内に芽吹き始めていたある感覚に、更に不安を

感じていた。嫌な予感がする、それが静かに波立つ海が自分たちを呑み込もうとしているのではないかと言う錯覚まで陥らせた。

武蔵の嫌な予感は、当たってしまった。水しぶきを通じて伝わる衝撃音。そして鳴り響く警報。武蔵が咄嗟に振り返った先には、最初の地獄が始まっていた。

『愛宕』は自身に迫る雷跡を発見していた。それは『愛宕』だけでなく、右前列にいた駆逐艦『岸波』も同じだった。彼女は狂ったように白い蒸気を噴き出し、汽笛を鳴らして『愛宕』のみならず全艦隊に敵の雷撃を警告した。之字運動を始めて二度目の転舵が取られた瞬間にもなったが、六時三十二分、『愛宕』に魚雷が命中。艦橋を覆うような水柱が立ち上り、更に二本、三本と立て続けに魚雷の刃が容赦なく『愛宕』に襲い掛かった。マスト以上の高さに到達した数本の水柱が、一万トンの艦を簡単に覆い隠してしまった。

『愛宕』が次々と魚雷を受け、煙を噴出しながら傾斜する姿を武蔵は見た。その光景は余りに衝撃的で、一瞬、武蔵は呆然としてしまった。煙を出す『愛宕』から、彼女の絶叫が聞こえた気がした。

艦隊は一瞬にして騒然となった。敵潜水艦の雷撃に、駆逐隊は爆雷戦を用意しつつ奔走する。『愛宕』と『高雄』を除いた第一部隊の巨艦群は『大和』から出された“青々”の信号を受け、右四十五度に一斉回頭。そのため、整然としていた隊列に乱れが生じることになったが、艦隊はそのまま前進を続けた。

舵を故障し、傾斜する『愛宕』、その周辺の海に漂流する『愛宕』の乗組員たち。これを助けようと駆逐艦がぐるぐると回るが、隊列は乱れ、回頭する艦が多く、支離滅裂な状況に陥った。

海に漂流する乗員たち。彼らは材木にしがみついたり、漂流する者同士でしがみついたり、必死に荒れる海面の中を生きるためにもがいていた。その周囲を、味方の駆逐艦が近づく。彼らは救助の手を待ったが、近付いてきた駆逐艦の艦橋から拡声器が彼らの頭上

に降りかかった。

「来るなッ！ 機械を投棄するから、艦体から遠ざかれッ！」
その命令に理解できた者は誰一人いなかったらう。更に続いた
「本艦はこれより前進する！」の号令に、漂流する彼らは驚愕しな
いわけにはいかなかった。

だが、彼らは助けを乞うことはなく、黙々と命令通りに艦から遠
ざかった。無言で艦を見詰める漂流者たちの上を、駆逐艦『岸波』
が猛然とした勢いで駆け出していった。

「……………」

駆逐艦『岸波』の艦魂は、自身を見詰める漂流者たちの無言の視
線に押しつぶされそうな思いを抱いた。今にも震える膝が崩れてし
まいそうだったが、その自分の足が、漂流する彼らをひき殺してい
く。

「…………ッ、う、う…………ッ」

声を押し殺し、血が滲む程に下唇を噛んだ彼女は、味方の艦にひ
き殺されていく彼らの視線を受け止めながら、ひたすら前進を続け
た。

六時五十三分、傾斜五〇度を越えた『愛宕』は遂に沈没した。海
面には重油と中将旗が浮き出していた。

沈没する『愛宕』から遠ざかる各艦では、死に往く仲間がいる後
方に後る髪を引かれる思いでするすると前に進みながらも、急角度
にジグザグ前進を続けていた。一刻も早く敵潜の潜む海域を抜け出
さなくてはならない。あ号作戦で旗艦『大鳳』がやられたように、
日本艦隊は再び旗艦を真つ先に失ったのだった。

武蔵はぼんやりと、血の気のない顔で後ろを振り返っていた。誰
にも手を差し伸べられることもなく、味方が一隻、死に落ちていく。
武蔵が初めて見た光景だった。

あの場所で、救助に向かったと思われた駆逐艦『岸波』が、『愛

宕』に座乗していた栗田中将以下幕僚の収容が終わると同時に、前進の命令をかけて漂流者をひき殺していった事実など、武蔵には知る由もなかった。味方の艦が味方をひき殺す。それは戦場で起こった一つの悲劇だった。

だが、艦隊の悲劇は続く。『武蔵』に一斉回頭の旗流信号が揚がり、それに合わせて後続の『羽黒』が左に回頭した直後だった。二本の魚雷が突然、『羽黒』に命中。

更に武蔵の前方にいた『摩耶』が四本の魚雷を受け、轟沈。

『摩耶』の轟沈は、すぐ後方を追尾する形で航行していた『武蔵』には目の前の光景として映された。勿体ぶるような鈍い音の後に、鉄の塊がまるで紙のように千切れた。その間を、乗員たちを巻き上げるように天高く大木のような水柱が昇る。水柱が海面に落下し、大量の水しぶきが晴れた後には、かつて『摩耶』がいた海域に生存者が浮いているだけの光景が広がっていた。

「そんな……」

連続するように目の前に見せ付けられた、壮絶なる仲間の死。その信じられない現実が、出撃直後に抱いた武蔵の固い意志に、早くも亀裂を走らせていた。

レイテ湾に砲弾の雨を降らすことを目指していた栗田艦隊は、次々と重巡洋艦を失っていった。米潜水艦の雷撃により、『愛宕』と『摩耶』の沈没に続き、『高雄』が大破した。

一発の砲弾も撃つことを叶わなかった彼女たちの無念を引きずりながら、艦隊はレイテ湾を目指し続けた。その中、栗田長官以下幕僚が移乗した『大和』をはじめ、『武蔵』を含めた巨艦群の雄大さは尚、健在ではあった。

『大和』座乗の第一部隊司令官の宇垣纏中将の指揮により、乱れていた隊列はようやく整い出し、艦隊の速力も順調に上がっていった。大破し、漂流する『高雄』に駆逐艦三隻を残し、沈没した『愛

宕』『摩耶』の乗員救助の命令が飛び、それでも艦隊はレイテ湾という目標を諦めるつもりは微塵もなかった。

敵の攻撃により艦隊に早くも犠牲が出たとしても、他の艦からは出撃当初と変わらず海面を轟然と進む大和型姉妹の姿は依然として頼もしく映った。彼女たちこそが、この艦隊の象徴・中心であると言うように。

聳え立つ城と言う表現が合いすぎる『大和』は、艦隊の中で一番に目立ちながらもまだ敵の攻撃を受けることはなかった。

そんな皮肉を自虐するように思った大和は、苦笑を表すように、愛刀の刃を整えていた。

「……………」

まだ敵の戦艦を一度も斬ったことがない己の刀を見詰める大和。世界最大を誇る巨砲を持った、神秘の大戦艦。日本が今まで鍛えてきた造船技術の全てを注いで生み出された自らの存在を、大和はまだ満足に発揮していなかった。愛する母なる国に、まだ恩返しもできない親不孝な子供。

「（それが……私たち姉妹か）」

自らが生まれるほぼ同時期に始まった争乱の時代。だが、不幸にもその時代は、自分たちに時代遅れと言った。既に戦争の主役は航空機と航空母艦に変わっており、戦艦は戦術的価値を失いつつある。どんなに願いを請おうとも、時代がそれを許さない。

だが 日本を救うには、時代遅れの自分たちしかない。

戦況の悪化に伴い、大半の航空戦力を失った日本に残されたのは、戦艦を中心とした大艦巨砲の塊。

今回の決戦も、正にその総力を以ての戦いとなる。全滅覚悟の決戦。だが、最後に残された自分たちの全滅は、日本と言う国自体の死にも繋がる。それでも 愛する国は、それを望んだ。

国のために生まれ、国のために与えられた命。それを国の望むままに使うことに、何の戸惑いがあるのか。

「それこそ、本望なのだ」

斬ったことがない刀は新品同様に美しい。穢れていない故の美しさもまた芸術品のように映える。だが、その美しさを国は望んでいない。

眼前に刃を鞘に納め、大和は強い意志を瞳に宿す。それはまた武蔵とは違った強い意志だった。

大和は愛する妹の方に視線を向ける。自身と同じく艦隊の雄姿を映す鏡となっている妹を、大和は姉としての心配を拭い去ることはできなかった。

先ほどまでの強い意志を見せていた彼女はどこへ行ってしまったのかと憂うほど、今の武蔵の姿は誰が見ても気の毒以外のものではなかった。所詮は年端もいかない幼い少女と、容赦なく突き放せるような、今にも折れそうな姿を晒している。

「……………」

目の前で立て続けに見せ付けられた、壮絶なる仲間の死は武蔵にとって衝撃が大き過ぎた。覚悟していたとは言え、連続的にあそこまで仲間の悲惨な死を目の辺りにすれば、精神が布のようにずたずたに切り裂かれる思いを味わう。しかも、それが今度は自分の身に降りかかるのではないかと言う恐怖も芽生えて仕方なかった。

「逃げちゃだめ……逃げちゃったら、戻れなくなる……」

両肩を掴み、武蔵は自身に言い聞かせるように呟き続ける。

出撃した時の記憶が武蔵の頭の中をぐるぐると駆け回る。まるでしゃがみこんでしまった武蔵を取り囲むように。

ああ、自分は何て弱いのだろう。

私がしっかりしていないといけないのに。私やお姉ちゃんが頑張らなくちゃいけないのに。

何で私は駄目な、臆病な子なのだろう。

私もお姉ちゃんみたいに強かったら

そこまで考えて、武蔵ははっとなる。

姉も言っていたではないか。自分は決して、完璧ではないと。

武蔵や他の皆とはどこも変わらないのだと。

皆、同じ立場、同じ空気の下にある。そして各々の様々な思いがそこにある。

それは様々なれど、ある所は皆同じ。

自分だけが、特別ではない。

みんなが、みんなのために、戦わなくてはいけない。

自分だけが　　と言う甘えは、もう許されないのだ。

「……………」

武蔵は額に巻いた鉢巻を解き、眼前に見詰める。そこには自分の決意の表れが刻まれていた。

「……戦うんだ、私は」

そう言った武蔵の瞳には、強固な意志が帰っていた。水晶のような瞳に、青い炎が燃えている。その炎は澄んでいながらも、とても強く燃えていた。

鉢巻を再び縛った武蔵は、満天に輝くフィリピンの夜空を見上げた。今まで下を見てばかりで気付かなかった星の美しさがそこにあった。それは艦隊の雄姿を称えるように、美しくはつきりと輝いていた。顔を上げなければ見えないものもあるのだと、武蔵は気付かされた。艦隊は星空が見守る中、悠然とパラワン水道を通過しようとしていた。

四 戦闘

飛行機が飛ぶには絶好の天気だった。その下を進む日本の大艦隊は、一路敵目標を目指す。既に別の海域等では戦闘が起こっていた。後に出撃した西村艦隊が敵編隊の盲爆を受け、戦艦『扶桑』『山城』も敵の牙に侵された。搭載した爆弾諸共敵艦に突っ込むと言う壮絶な光景も目撃されると言う比島沖での戦闘の最中、遂に栗田艦隊も、特に 戦艦『武蔵』にとつての運命の時が近づきつつあった。

戦艦がようやく高まる中、栗田艦隊は対空戦闘に備えながら、各艦がより行動の自由が取れる間距離を取って前進を行った。実は、既に艦隊は遂に敵索敵機によつて発見されていた。大多数の敵編隊が押し寄せてくるのも時間の問題だろうと言うことは、全将兵のみならず、彼女たち自身も覚悟していた。

そして栗田司令部より、全軍に指令が届けられる。

敵機来襲近シ、天佑ヲ信ジ、最善ヲツクセ

その栗田司令部の指令が、『武蔵』には艦長から艦内放送によつて伝えられた。それを聞いた『武蔵』の乗員たちは今か今かと敵編隊の来襲が予期される晴天を睨んだ。武蔵もまた、緊張の面持ちを持って、青々と広がる空を見据えた。

必ず現れるとわかつている敵機が中々現れないと言う、それはそれで不安と緊張が張り詰める『武蔵』の艦上に、淡い光が空間の狭間から現出した。そこから降り立ったのは、整えたポニーテールをきつちりと伸ばした大和だった。

降り立った大和の目の前には、待っていたかのように、鉢巻を額に締めた武蔵が毅然とした様子で立っている。大和はそんな妹の姿

を見て、思ったことを口に出さずに、戦士になろうとしている妹の前に歩み寄った。

「武蔵」

大和の掛けた声は、軍人らしくもあり、姉らしくもあるいつもの声色だった。一瞬、武蔵の顔が普段の妹としての顔を浮かべる。

武蔵は微かに口を開くが、すぐにきゅっと閉じてしまう。姉に甘えたいと言う欲求が丸見えの妹を目の前にして、大和は内心で微笑ましく笑った。

まあ、私も他人のことは言えないが……

目の前にいる妹を甘えたいと言う気持ちは、果たして許されることだろうか。大和は珍しく自問していた。

だが、同じ気持ちを我慢した妹を見て、大和は決意した。妹がこんなにしっかりしているのに、姉である自分がこんなことではどうする

「もうすぐ敵編隊の空襲があるだろう。心して掛かれよ」

本当に言いたいことは、こんなことではないのだが。

「勿論です。最善を尽くします」

武蔵も相応に応えるように、敬礼しながら言った。

ここにいるのは軍人としての、戦友同士の二人。

それを互いに理解しての、やり取りだった。

「……………」

無言の時間が生まれる。簡潔に告げてしまったことと、そんな装いが仇となったか、変にきままずい空気が流れる。

だが、このまま別れるのも正直惜しかった。やはりわかっていても、これから激しい戦闘になることがわかってから尚更、このまま何もせず別れるのは正直惜しいのだ。

「……ッ」

何か言いたかった。何かを伝えたかった。だが、言葉が何故か見つからなかった。何も出ない自分の口がもどかしい。

覚悟はしていたとは言え、実際にその状況に直面すると、人はこ

んなにも動揺してしまうのか。自分が自分らしく無くなってしま
うのか。大和は初めて、困惑した。それは今までになかった感覚だっ
た。その原因は、きつと自分と同じ直面する場に、愛する妹がいる
からなのかもしれない

困惑に身を絡まれた大和に、暖かい感触が触れた。それが柔らか
く大和の身を包み込む。

大和の胸に顔を埋めて、武蔵が大和の身体に抱きつく。そんな状
況に、大和は一瞬呆然となった。

「……………」

突然の出来事に、大和は躊躇した。

大和は何か言葉を掛けようとしたが、その前に武蔵が静かに離れ
た。

離れた武蔵の顔を見て、大和は驚愕した。

武蔵もまた、同じ気持ちだったのだ

でも、互いに言葉を交わすことは決してなかった。言葉はいらな
い。言葉を交わさずとも、お互いの気持ちは、充分に理解していた。
それは大和も、武蔵も、お互いに。

武蔵は表情を整えるように、直立不動になって敬礼した。そして
大和も、同じように答礼した。

そこにあるのは　これから戦いに身を投じる互いの武運を祈
る、戦友の姿であった。

どこからともなく敬礼を下ろすと、武蔵と大和は互いに微笑み合
った。

二人の交叉する思いが確かめられたのを待っていたと言わんばか
りに、敵機来襲を告げる警報が鳴り響く。

それを聞いた大和は、武蔵に一瞥を与えてから、自らの戦場へと
戻っていった。それを見届けた武蔵も、黒い点がぼつぼつと浮かぶ
青い空を見据えた。

十時二十五分、『大和』の電探が遂に敵編隊を捕捉した。

「敵機、四十機発見ッ！ 一六〇度方向ッ！！」

即座に『大和』より全艦隊宛てに敵機発見の信号が発せられた。速力を上げた艦隊の中、『大和』にZ旗が揚げられる。外にいた兵員たちが一斉に艦内へ退避する。それに合わせるように、『大和』の巨砲九門が唸りをあげて旋回、空に多数現れた敵編隊目掛けて、砲身が上げられる。

手持ち無沙汰にされてきた大和の刀が遂に天空に向けられた。鞘から解放された大和の刀は、敵の血を欲している。大和は刀の先を敵編隊に向けつつ、鋭い眼光をじつと敵編隊に射した。

大和の刀が、すつと構えられる。そして

艦体を揺さぶるような地震が『大和』に襲い掛かった。『大和』が誇る九門の巨砲が、一斉に火を噴いたのである。火山の噴火に似た轟音と共に、三式弾が敵編隊の只中へと飛び込んでいった。

少し間を置いた後、刀を一閃振るった大和の視界に、五つほどの黒い線が空から落ちていくのが見えた。

「敵機五機撃墜ッ！！」

そんな報告が『大和』艦内に伝達される。歓喜が沸き起こる。三式弾の効果が遺憾なく発揮された瞬間だった。

『大和』の第一射を発端に、各艦の主砲が火を噴く。合計一二〇門の砲火が空に撃たれた。副砲、高角砲も加わり、敵機の周囲を火の雨があつという間に囲んだ。全艦隊を覆う壁のように弾幕が敵編隊に向かって放たれるが、勇猛果敢な敵機はそんな鉄壁さえも潜り抜け、我先にと艦隊に向かって突っ込んでくる。弾幕を潜り抜けた敵機の機銃弾や爆弾が、今度は各艦に襲い掛かってきた。

米軍の第一次攻撃隊は、艦隊の中でも一際目立つ大和型戦艦の姉妹を集中的に狙ってきた。輪形陣の外輪に陣取る駆逐艦の猛射を潜り抜けた敵機が、『大和』と『武蔵』に機銃と爆弾の雨を降らせた。

敵機から連続して放たれる爆弾は、幾つもの高い水柱を作り出し、巨艦を覆い隠してしまった。遠方からこの光景を見た者たちは、思わず爆弾が命中したのかと思う程だった。しかし、その中から獰猛に水の壁を突き破ってくる大和型戦艦の姉妹の姿は、その怯まない勇敢なる姿として見る者に感動を覚えさせた。

激しい戦闘の中を、武蔵は必死にその身を投じていた。正に投げ打つような感覚で、武蔵は戦いに身を振るい続けた。すぐそばまで接近してきた敵機、横切る敵機、爆弾を落としてから頭上を通り過ぎる敵機、自分に近寄る全ての敵を見据えるように、武蔵は目まぐるしく視線を向け、奮闘した。そして一機でも多くの敵を倒そうと、武蔵は縦横無尽に疾走するように戦った。

「ッあ……！」

声にならない声をあげながら、武蔵は必死に刀を振るった。正に必死だった。飛び散る破片や硝煙に視界を奪われても、水柱が自分を濡らしても、構わずに武蔵は戦った。一機、また一機と目の前に現れる敵機に向かって斬りかかる。だが、中々敵を斬ることは叶わなかった。

「来るな、来るな……ッ！！」

敵機は無数に自分の方へ殺到する。中には、パイロットの顔が見える程の距離もあった。敵のパイロットの顔なんて見たくなかった。人間なんて見たくなかった。見ると、自分が彼らを“殺そう”としている事実を改めて思い知らされるから。そして同時に、彼らもまた自分を“殺そう”としていることも。

「来る、なあ……ッッ！」

その時、武蔵の放った一閃が、硝煙から飛び出してきた敵機の翼に赤黒い花を咲かせた。翼をばきりと折られたように、敵機は身を翻しながら煙を吐き、武蔵の頭上を飛び越えて、そのまま海に向かって消えた。

『武蔵』の対空砲を浴びた一機の敵機が、やっとの思いで撃墜された瞬間だった。

武蔵はそのまま、ぺたんと前に手を付いてしまった。そのそばに刀が落ちてしまう。その一瞬の内に、武蔵は自分が斬った敵機が、攻撃機であったことを思い出していた。そしてその弾倉が閉じかけていた所も。

硝煙が晴れ、武蔵は視界の端に奇妙なものを見つけた。顔を上げ、海面の方に視線を投げてみると、海面に白いものがぼんやりと浮かんで近づいてくるのが見えた。それが魚雷とわかるまで、長い時間は要しなかった。

その瞬間、『武蔵』の艦体はズズン、と揺れた。だが、航行や戦闘状態に関して影響が生じる程のことでもなかった。しかし武蔵は確かに横腹の辺りに刺さるような激痛を感じた。「ッ！」と、声を噛み殺して、武蔵は血渋きをあげて倒れた。

「な、なにが……」

武蔵は火のように熱い横腹を、手で触れてみた。そして生暖かい感触を拾った手に視線を落とすと、武蔵は思わず「ひっ」と声をあげかけた。

その手のひらには、自分の赤黒い血がべったりと付いていた。

初めて、攻撃を受けたと言う実感が沸いた。だが、巨艦である自分に一発の命中弾を受けようが、沈むことはない。

「こんなに、痛いものなんだ……」

艦のダメージは、その魂となる艦魂の身にも反映される。しかし、その痛感は未知数だ。どんなに痛くても、艦が無事であれば、死ぬ意味を持つ沈没の瞬間まで、味わい続けることになるだろう。

こんな痛みを、後、何度受けるのだろうか

ぶるりと悪寒が走った。傷は熱く、痛い。しかし武蔵は立つ。まだまだ戦える。自分にとっては屁でもないくらいの傷のはずだから。事実、『武蔵』は右舷に一発の魚雷を受けたことになったが、速力も落ちていないし、戦闘に支障はなかった。

しかし、今後自分の身に降りかかる運命を、武蔵はまだこの時知る由もなかった

五 死闘（前書き）

彼女たちの そして武蔵の壮絶なる闘いをご覧ください。

五 死闘

米軍の第一次攻撃隊四十四機は戦艦『大和』『武蔵』に殺到したが、『大和』に命中弾はなかった。『武蔵』は魚雷一本を受けたが、まるでかすり傷程度のように平気で航進を続けた。魚雷が命中した箇所からは、まるで血のように、青い海面に『武蔵』の重油が黒い尾を引いていた。その重油の跡が、やがて第二波、第三波の格好の目印になることを、彼女は知る由もない。

しかも思いがけない事態が彼女の身に降りかかっていた。被雷の際の衝撃で、主砲方位盤が故障したのである。それは、自慢の巨砲による一斉射撃が不可能になったことを意味していた。

それでも『武蔵』を含めた栗田艦隊はタブラス水道を過ぎて、シブヤン海に進出した。陽の光は相変わらず眩しく、これ以上ない程の晴天だった。

その間、横腹に包帯を巻いた武蔵を見舞った大和は、武蔵の姿を見て絶句した。戦闘の最中に無傷と言うのは負傷よりあり得ない。と言いながら、大和自身は今の所無傷ではあったが、武蔵の傷ついた身体を見て、大和はショックを感じ得なかった。艦自体は大丈夫だろう。だが、妹の傷ついたと言う事実は、大和には自身が思っていた以上に衝撃的だった。大和はその思いを表に出さないように努めたが、逆に武蔵に「心配しないで」と気を遣われてしまった。大和は妹に見透かれる自分を呪った。

「（私が、武蔵を護る……これは、絶対だ）」

大和の中に、新たな決意が生まれていた。

十二時三分、第二波の敵攻撃隊三十五機が太陽を背に栗田艦隊に襲い掛かった。艦隊から一斉に対空砲の弾幕が乱れ、空に咲いた無数の火の花や煙があつと言う間に太陽を覆い隠した。まるで海上は曇り空が覆ったように暗くなった。

機銃弾の火線が、一機の敵機を貫通した。敵機は火だるまになりながら海面に落ちていく。しかし、そんな『武蔵』の対空砲からは統一性が消えかかっていた。『武蔵』の主砲方位盤故障が他の戦闘配置部署に影響を与えていたからである。

先の主砲方位盤故障による損害で、統一的射撃指揮が取れなくなっていた。そのため各主砲の砲塔は独立射撃を指示されていた。本来、主砲は遠距離にいる敵機射撃を目的としており、これを発射する時は機銃員を退避させてからの実施となる。機銃や高角砲は主砲の砲撃を潜り抜けてきた敵機に対する近接戦闘用だ。だが、今の統一的射撃ができなくなった『武蔵』の主砲は、各砲塔が各自自由にしかも機銃員の思いがけない時に発射されるものだから、機銃員は一・四トンもの砲弾が放たれる衝撃をもろに受ける羽目になってしまった。おかげで機能を奪われ、更に衝撃で身体を吹き飛ばされる機銃員にはたまったものではなかった。

主砲発射の爆風を受け、木の葉のように身を吹き飛ばされた機銃員たちの末路を見た武蔵は、何時かの主砲試射の際の、実験用のモルモットの亡骸を思い出していた

それでも『武蔵』は己の砲弾を全て使い果たすような勢いで、連射を続けた。『武蔵』の頭上はまるで傘が覆うように、弾幕の壁が出来上がっていた。

しかし、それで『武蔵』の身が無事に済む結果には到底成り得るわけではなかった。

第二波の空襲が終わった。戦艦『武蔵』の艦上は散々たる光景だった。撃ち尽くした弾が無数に散らばり、敵機の凶弾に倒れた者、味方の主砲発射の衝撃で薙ぎ倒された者、様々な形で死に至った者たちの遺体やその一部が転がっていた。血にまみれた甲板や構造物。大和はそれらの光景を見た時、自らの艦上と比べて、断然に『武蔵』の有様の方が上回っていることを実感した。

「武蔵……」

大和はぼつりと、武蔵の名を呼んだ。それに応えるように血まみれになった妹が、笑った。

「お姉ちゃん……」

戦闘が始まって初めてお姉ちゃんと呼ばれた。

大和は自分より先に傷だらけになっていく妹を見て、心が張り裂ける思いに駆られた。

武蔵は第二波の攻撃の前よりも、身体中を血に濡らしていた。

第二波の攻撃で、『武蔵』は敵機の集中攻撃を浴びて、魚雷三本を左舷に受け、更に二五〇キロ爆弾の直撃を二発、至近弾五発と言う傷手を負った。その影響により、速力は二十二ノットに落ち、次第に隊列から落伍を始めていた。

護る、と腹に決めていたにも関わらず、武蔵はどんどん傷ついていった。大和は妹に襲い掛かる敵機を撃墜しようとするが、逆に『武蔵』が、まるで『大和』を庇うように敵の攻撃の一手を引き受けて、集中的に浴びているように見える。

それが気のせいであってほしい。まさか妹の方が自分を護ろうとして、こんな姿になってしまっているなんて、考えたくなかった。

しかし 武蔵が大和に向ける笑顔が、大和の考えを否定しないようにしていた。

武蔵は何も言わない。だが、明らかに

「まだまだ」

大和はその声の方向に視線を向けた。

そこには、血まみれになりながらも笑顔を絶やさないう武蔵がいた。

「武蔵……」

「まだまだ大丈夫だよ、お姉ちゃん。 私、まだ戦えるよ」

大和は、また困惑した。

自分が知っている妹は、どこに行ってしまったのか そんな思いを、一瞬だけでも自分の頭の中に過ぎらせてしまったのだ。

身体が傷ついただけではない。その目で地獄絵図のような光景を

散々見たはずである。傷ついているのは、身体だけではないはずだ。
なのに　　妹は、優しい笑顔を忘れていない。
本当に目の前にいる妹が、あんなに不安や恐怖に竦んでいた妹なのだろうか。

「（何を、馬鹿な……ッ！）」

大和は自分を叱咤した。妹が妹以外の何者でもないのは当たり前のことだ。こんな馬鹿なことを一瞬でも考えてしまった自分こそ、どんなに脆弱な奴なのか。

大和は知らない。武蔵は、命を削る思いで、正に魂を削ることで、自分が戦う意味を理解し始めていることを。それが、今の武蔵を形作っていることを。

武蔵は見つけたのだ。

護りたいものが、そこにあることを

そしてそれが、戦いの中で得ることができる強さなのだということを

自分が戦い、傷つき、護りたいものが護られていることを知ること、その者はどこまでも戦えるのだと。

大和は空を仰いだ。どこまでも広がる空の青が憎かった。護衛の戦闘機が一機もない空なんて必要ない。少しずつ傷ついていく仲間を、家族を見て、大和は耐えられない思いを抱いていた。

これが、二人の姉妹が最後に交わした思いだった。

この頃、隊列から脱落しかける『武蔵』の姿を、後方から見守っ

ていた『大和』の艦隊司令部も耐えられなかった。護衛の戦闘機もない以上、繰り返し返される敵機の空襲は防ぎ切れない。そして敵機は傷ついた『武蔵』を集中的に襲ってくるのは容易く想像出来た。

栗田司令部は傷ついた『武蔵』を見ながら、この作戦全体の経過を懸念していた。凶役を買って出た小沢艦隊は果たして敵機動部隊を引き付けているだろうか、基地航空隊は敵戦力に打撃を与えることは出来ているだろうか、そんな焦りが司令部の中にあつた。

栗田司令部は再三に渡って小沢艦隊に対し、状況把握を求めて電信を打ち続けたが、返事は返ってこなかった。小沢艦隊は目的通りに敵機動部隊を引き付け、その状況が栗田艦隊に送られていたが、栗田司令部はそれを知らなかった。

代わりに来たのは 敵の第三波の攻撃だった。

一時三十三分、敵の第三波が傷ついた『武蔵』を中心に第一部隊に対して集中的攻撃を敢行。今度は無傷の第二部隊にまで襲い掛かってきた。爆撃機、雷撃機、戦闘機が入れ混じった六十八機の敵機群が容赦ない攻撃の雨を艦隊に降らせる。その中を突破しようと、栗田艦隊は依然サンベルナルジノ海峡に向かって東進、シブヤン海のど真ん中を猛進した。

この戦闘で『大和』も被害を受けた。一番砲塔前部に二五〇キロ爆弾二発が命中、上甲板を貫いて中甲板を炸裂、初の死傷者を出した。『大和』もまたこの比島沖の大決戦において傷を負った。

第四波も容赦なく襲い掛かる。まるで鷹のように大空から飛び降り、縦横無尽に飛び交う敵機は、見事な程に統率が取れ、強敵な相手だった。まるで潮のようにさっと攻撃を仕掛け、そして引いていく。中々こちらの攻撃を浴びせられない。なのにこちらの被害が増

えるばかり。水上艦の攻撃が如何に航空機に対して無力なのかが思い知らされる戦いだった。

大和は腕にぎゅっと歯に噛んだ包帯をきつく縛った。敵の攻撃を初めて浴びた大和の傷だった。しかし、武蔵はもつと傷ついていた

『大和』に次ぐ巨艦『武蔵』は傷つき、遂に後方にいた第二部隊の目と鼻の先に姿を現した。速力が落ち、隊列から落伍したのである。『大和』は落伍する『武蔵』を引き止める術を持たなかった。ただ後方へと取り残されていく『武蔵』を悲しげに見詰めるしかない。だが、『武蔵』はまるで『大和』に先に行けと言っているように海の上を這っていた。

戦艦『武蔵』はその身を遂に海水に浸からせていた。傾斜は一〇度ほど傾き、火や煙を発することもなく、ただその身を海水に少しずつ浸からせて、ゆっくりと漂うだけだった。菊水の紋章が、重油の色を帯びた海水から顔を出しているが、艦首は海面に向かって突っ込んでいる状態にあった。

艦上の現状と言えば、言葉では言い表せないほどの光景だった。遺体ばかりが転がる艦上は、火薬の匂いがまるで線香の匂いのように思える。人の一部がまるでボールや棒切れのように無造作に転がっている。そして、その場に似つかわしくない少女は其中で一人、血に濡れた身体を晒しながら天を仰いでいた。

敵の度重なる空襲によって深く傷ついた『武蔵』は、三分の一の機銃と機銃員、半数以上の弾薬補給員を失い、最早戦闘能力は失いつつあった。速力は低下し続け、既に第一部隊の陣列から落伍し、ただ孤独に漂流している。そんな『武蔵』に対し、栗田長官から発せられた命令は、マニラへの避退だった。それは艦隊の“主砲”の一つである、『武蔵』のレイテ湾突入を断念させると言う意味だった。

自分が艦隊の主砲として、付いてきてくれるみんなのために、覚

悟を持つて作戦を成功させようと決意していたのに　それが叶えられなくなったことに、武蔵は苦痛と悲壮感を持って、後退する我が身を何度も悔いていた。

既に姉とは顔を会わせられない距離まで遠ざかっている。姉をはじめとした他の艦隊のみんなは意気揚々と敵の空襲を潜り抜けながら目標に向かっていく。なのに、自分はみんなに付いていけない。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

何度目かわからない謝罪の言葉を繰り返す。苦痛と悲壮感で胸がいっぱいなのに、涙はどうしてか出てこない。泣く、と言う基準がよくわからなくなっていた。

「もう何もかも、ごちゃごちゃしてて……私、よくわからないよ……」

武蔵は、身体だけでなく精神も傷だらけだった。四度の敵の空襲、その過程に見た光景、戦い、全てが武蔵の中に荒れ狂う波として押し寄せ、武蔵の中にあつた純情な欠片を押し流してしまった。

そんな中でも、武蔵の脳裏には世界でたった一人の姉の顔だけが浮かんでいた。とても格好良い、そして可愛い、自慢のお姉ちゃん。

「お姉ちゃん……今、どこにいるの……？」

姉と自分は今、分かれた道をそれぞれ進んでいる。姉はそのまま戦いの海に向かい続けている。そして自分は　どこへ向かっているのだろうか、自分でさえわからない。

ただ、姉と会えない。それだけは、わかった気がした。

それが　更に、悲しかった。

武蔵の目の前に、淡い光が照らされる。しかしそれは姉の光ではなかった。

「七戦隊三番艦、利根であります。　武蔵殿」

現れたのは、第二部隊に属する第七戦隊所属の重巡『利根』の艦魂だった。武蔵は、厳しい表情で現れた利根の顔を、ただ傍観していた。

「私は貴艦の護衛並びに警戒任務を承り、参上致しました。　貴

艦の北方へ至るまでの警護を務めさせていただきます」

利根は敬礼を武蔵に向けながら護衛の件を伝えた。それを聞いた武蔵は、ただ、微笑んで応えた。

「ありがとう。感謝するよ」

「……………」

武蔵の惨状を目の辺りにして、堪え切れないと言う利根の表情が垣間見えた。敵に蹂躪され、傷ついた戦友の姿を見るのは、同じ兵士として耐えられないのだろう。だが、彼女は目を逸らさずに、最後まで彼女に視線を向けたまま、最後に、武蔵の武勇を讃えるためか、ぴしりと敬礼した。

武蔵も微笑を浮かべたまま、答礼する。利根は「必ず、お守り致します」と震えを抑えるような声で言い残すと、光に覆われて消えた。

『利根』は『武蔵』護衛の任を受けると、第二部隊の輪形陣から離れ、傷ついた『武蔵』に近付いていった。『武蔵』の護衛を任じられたのは『利根』一隻の他に、駆逐艦一隻。傷ついた巨艦『武蔵』を護衛するには明らかに数が足りない。それでも『利根』は、『武蔵』の護衛・警戒に当たった。

遅い速度で避退する『武蔵』に付いていく『利根』しかし、その『利根』が持つ電探が、第五波の敵の大編隊を捉えていた。

利根は出撃して以来、この作戦で初めて、一番の強固な意志を持って挑もうとしているのかもしれない。もうすぐ敵の大編隊が押し寄せてくる。敵は必ず、傷ついた『武蔵』を狙ってくるだろう。そして『武蔵』を護ることが、今の自分の任務だ。彼女を護ることは、敵機を一機でも多く撃ち落とすことである。

利根は、傷つき、血にまみれた武蔵の姿を思い出していた。彼女

を護ると、約束した。彼女の姉、大和の代わりに、自分が武蔵を護らないといけない。

「やるんだ……必ず、やってみせる……！」

利根はその瞳に決意の炎を燃やす。失敗は許されない。これ以上、戦友を死なすわけにはいかない。やがて空気を奮わせる轟音を唸らせ、現れた無数の黒い点が浮かぶ大空を、利根は睨んだ。

第五波の敵大編隊は予想通り、傷ついた『武蔵』に攻撃を集中してきた。速力を失った巨艦は、彼らにとっては単なる大きな的ではない。血のように重油の尾を海面に引き、遅い足で航行する巨艦を、敵機が群がるように襲い掛かってくる。

『武蔵』に攻撃を仕掛けてくる敵機を、『利根』は『武蔵』の北方二〇〇メートルから狙い撃った。『利根』の砲弾に落とされ、蠅のように落ちていく敵機。利根は必死に彼女を護ろうと、我が身の安全も構わず、弾を撃ち続けた。しかしこれを邪魔に思った敵が、その矛先を彼女の方にも向けるようになる。

一〇〇機以上の敵機が襲い掛かる中、内三十五機が『武蔵』を護衛する『利根』に攻撃を浴びてきた。『武蔵』に向かっていた敵機が、ぐるりと方向を変えて、『利根』に集中してくる。

「く……ッ！」

自分を狙ってくる敵を撃ち落とすのは至難の業だった。敵は編隊を組み、『利根』の対空砲を巧みに避けていく。数で攻めてくる敵に、利根は太刀打ちできなかった。やがて、その牙が遂に利根にも触れることとなる。

頭上の遠くから突然聞こえてきた爆音に気付いてみると、敵の爆撃機が急降下を仕掛けてきた。利根はこれを迎え撃つが、既に遅かった。急降下する敵爆撃機の周囲に火花が咲くだけで、その降下を

止めることはできなかった。そして、急降下した敵爆撃機は二五〇キ口爆弾を『利根』に投下、これが初の直撃弾となった。

『利根』の艦体から火が噴き出し、周囲の海面が大きく震えた。多くの乗員が吹き飛ばされ、『利根』は更に二度目の命中弾を受ける。

利根もまたその身体を傷つけ、満身創痍の状態と化していた。

「げほ……ッ」

足をひきずりながら、利根は煙の間から抜け出すと、北へと視線を向けた。そして、絶句した。利根の視界に映ったのは、その巨大な艦体から大きな火を昇らせる『武蔵』の姿だった。

六 紅涙（前書き）

唐突ですが、今回で最終話となります。

六 紅涙

この日最大の一〇〇機以上の第五波の空襲が去った後、『武蔵』はさざ波を立てながらも西方に向かつて動いていた。速力は一ノツト。甲板や構築物、ありとあらゆる場所は赤い血に染まり、艦橋、砲塔、甲板や機銃砲台は焼けただれ、人間の手や足、頭、腸が散乱し、最早今の『武蔵』は遺体を満載した鉄の塊だった。

武蔵自身も見るに耐えない姿だった。軍服は破れ、露出した肌は血に染まり、肌と服の区別さえ付かない。正に体中が血に濡れ、傷だらけだった。垂れた腕は焼けただれ、服の半分が破け、真っ赤になった肌を晒している。長い髪は血でべとべとなり、少女は血の塊と化していた。

この戦いで『武蔵』の護衛を任されていた『利根』も爆弾二発を受けて傷ついていた。他の随伴していた駆逐艦も初の死傷者を出した。これを受け、栗田長官は『武蔵』に駆逐艦一隻の増派を命じた。そして、その命令とほぼ同時に

栗田長官は信じられない命令を発したのである。

「反転、だと……？」

その命令を発した栗田長官の言葉を聞いて騒然となる艦橋の様子を、大和は呆然と眺めていた。『大和』艦橋に置かれた艦隊司令部。その長である栗田長官が、何を思ったのか、突然艦隊に反転を命じたのである。ここで西方への反転をするということは、サンベルナルジノ海峡に背を向ける形となる。いや、レイテ湾に背を向けることになる。

「何故だ。何故、ここでそんな真似をする……ッ?!」

大和は動揺した。その命令が、大和には理解し難かったのだ。確かに本艦隊は敵の空襲を何度も受け、全艦隊の速力は落ち、戦力も削られている。囚役の小沢艦隊も敵の機動部隊を誘導できているのかもわからない。それもあって司令部は判断に困る部分があるのだらう。

だが、例えそうだととしても、艦隊が反転する理由にはなり得ない。大和はそう思った。そもそも、この作戦は連合艦隊最後の決戦として、全滅覚悟を前提としたものだったのではないか。このまま突撃して全滅する恐れがあるから、と言うのが理由だとしても、それは今更ではないか？

将兵たちの命もまた尊し。それは理解している。だが、このまま目標から背を向けてしまえば、先に死んでいった彼らの犠牲が無駄になってしまう。そして大和にとっては何より

今は遠い後方で、傷つきながらも後退しているだろう妹の努力は

「く……」

もう何が正しいのか、わからなくなっていた。

だが、悔しい思いだけが明確に、そこにあった。

大和は下唇を噛みながら、押し寄せてくる衝動を抑えるように拳を強く握った。動揺する司令部の光景を目の辺りにしながら、全艦は針路を反転させた。

まるで死の苦しみから逃げるように、栗田艦隊は西に向かって速力十八ノットで進んでいた。サンベルナルジノ海峡突破の予定が崩れた栗田艦隊は、西に避退していた『武蔵』の後を追う形となっていた。一方、米軍はこの栗田艦隊の反転を見て、栗田艦隊が退却したのだと判断していた。

栗田長官の反転命令を受け、艦隊が西に向かっている頃、『武蔵』は沈まない戦いを敢行していた。彼女は左舷部に海水を浸からせ、その傾斜を徐々に傾けながらも、未だに浮き続けていた。その傾いた艦の上を将兵たちが、少しずつ自分たちの目の前に近付いてくる黒い海面を見ていく内に、不沈戦艦と言う言葉に対し、不信感を増幅させないわけにはいかない心境に陥っていた。

「『武蔵』は沈まない」

姉の『大和』と同じように、就役当初から言われてきた言葉。しかしそれを発する者は、今は誰もいない。

「おい、大分艦内も傾斜してきたぞ」

「そろそろこの艦も沈むだろ。まだ戦闘配置は解除されていないが、海で泳ぐことになるのも時間の問題だな」

そんな乗員の会話を、武蔵はただ無心に聞いていた。かつてはあれだけ不沈と豪語されてきた自分が、今となつてはあっさりと“沈むのは時間の問題”と言われるようになっていく。だが、それに対して武蔵は疑う余地を微塵も感じていなかった。自分のことは、自分が一番よくわかっていた。

艦は傾けばやがては転覆し、海中へと沈む。『武蔵』は艦橋と主砲等の上部構造物が重いために復元力が弱く、傾斜が大きくなり過ぎると転覆する。

敵機の魚雷は左舷に集中して命中したため、注水による復元は不可能になっていた。傾斜は増すばかりで、やがて転覆すると言う末路になるのは目に見えていた。

乗員の一人一人が感じられるほど、傾斜は増していた。武蔵は傾く自分の艦上で、赤く染まる隔壁に背を預けて、焼けただれた腕をだらんと下げている。赤い血に染まった細い身体は穴だらけで、生きているのが不思議なくらいだった。

それでも武蔵は生きていた。生き続けようとしていた。何が彼女をそうまでさせているのか。それは誰も知る由がない。

ただ、武蔵は一人、死に近づく自分自身を他人事のように感じな

がら、こんなことを考えていた。

「（いざ、こうして死を間近にしてみると……感じ方って全然違うものなんだなあ……）」

あれだけ恐かった死というものは、いざ身近に近付いてくると、死に対する感覚が変わってくる。確かに死は恐い。それは変わらないし、むしろもっと恐い。だが、震え、泣き喚くほどの余力はない。自分は艦であり、沈むことは死に繋がる。そんな漠然とした考えが脳裏に浮かんた。ただ、沈没は死なんだと、それが改めて思い知らされた。

「お姉ちゃんやみんなは……大丈夫かなあ……」

今もこの広い海のどこかで、戦いに赴いている姉や仲間たちのことを思い、武蔵はぼつりと呟いた。

傷つき、今は死を待つしかない自分の代わりに、姉たちは敵の只中に立ち向かっている。

一緒に行けなかったのが、本当に心苦しいが自分の戦いが、少しでも彼女たちのためになっていたらと、願わずにはいらなかった。

武蔵の思いが届いたのか、反転した栗田艦隊は再び再反転、敵中に向かって進撃していた。栗田艦隊の反転を退却と思い込んで狼狽した連合艦隊司令部から進撃命令が届いたが、既に栗田艦隊は再び敵に向かって進撃していた。

天祐を確信する思いで進撃する栗田艦隊。だが、後方に残された『武蔵』に、到底天祐が確信されることはなかった

日は落ち、薄暗くなった海に浮く巨艦の哀れな姿。しかしその海には、悲壮的な意志のもとで動き続ける者たちがいた。

左舷に傾斜して止まらない『武蔵』を艦尾から曳航しようとしてそろそろと近づく駆逐艦『清霜』の姿があつた。何とかして彼女を救い出そうと懸命な、小さな駆逐艦の少女の努力も空しく、『武蔵』はゆっくりと沈没の道に向かつていた。

午後六時半、「総員集合、後甲板」の号令がかつた。そろそろと後甲板に集合する乗員たちの光景を見て、小さくなる自分の命の灯火を改めて自覚した。

そしてほぼ同時に、武蔵は驚いていた。後甲板に集合した将兵の数は、武蔵を驚愕させるのに十分だった。その数、二千名。猛烈な敵の攻撃を受けた自分の上には、まだこれだけの生きている者がいたのだ。まだ、彼らは生きている。自分はもうすぐ死ぬだろうけど、まだこれほど多くの命が、生きているのだ。その事実が、死を目前とした武蔵の中に小さな希望を沸かせた。

死を目前としているのを直接表すように、既に艦首は海面と化していた。主砲が海面から顔を覗かせているが、既に甲板は沈み、海原となつている。その艦は、暗い海の中へ進もうとしている。

淡い月の光が照らす夜空の下、夜闇に溶け込んだ黒い海の上で、『武蔵』はゆっくりと傾斜を増しながら浮いていた。

じつと瞳を瞑っていた武蔵は、時が来たことを悟るように、瞳を開いた。

丁度、半壊したマストから、乗員たちの手によつて軍艦旗が降ろされる所だった。

降ろされる軍艦旗。武蔵は自分がもうすぐ沈むことを知る。

同じ軍艦旗を手に、共に戦ってきた戦友たちを思い出し、愛しい姉を想い、武蔵は記憶を巡る

「みんなに……お姉ちゃんに出会えて……良かった……」

記憶はまるで水のように武蔵の中を流れていく。

そして最後に流れ、思い出すのは

大好きだった姉の顔。

とても格好良くて、優しくて、可愛くて、本当は誰よりも大きなものに悩んで背負ってきた姉。

妹を可愛がってくれる姉が大好きだった。

頼りになる姉が大好きだった。

何でも教えてくれる姉が大好きだった。

「私は」

傾斜が増す。

マストから軍艦旗が降ろされると、まるでそれを待っていたかのように、更に傾斜が増した。

余りの傾斜に、滑り落ちる者もいた。

いよいよ、もうここには居られないと言うように、次々と乗員たちが暗い海に飛び込んでいく。

乗員たちが次々と脱出する中、武蔵は虚空に手を伸ばす。

周りには、既に誰もいない。

そこには、武蔵しかいなかった。

焼けただれ、全身を血まみれにした武蔵だけが、手を伸ばす。

そんな手を

「お姉ちゃん……」

伸ばした武蔵の手が、大和の暖かい手の温もりに包まれた。

目の前に光として現れた、大好きな姉。

優しいような悲しそうな表情の大和が、武蔵の手をそつと触れていた。

これは幻覚だろうか。

遙か遠方に行ったはずの姉が、こんな所にいるはずがない。

だが、幻覚でも何でも良い。

大好きな姉ともう一度会えたなら。

死ぬ前に、姉の顔が見れたなら。

そして、この温もりが事実として感じられるなら
もう、十分だよ

「私、お姉ちゃんの妹でいられて……幸せだった……」

最後に、武蔵は目の前の姉に最後の想いを伝えた。

武蔵は、笑っていた。

涙を流しながら。

そして、武蔵は光となった。

戦艦『武蔵』は遂にその身を完全に転覆させた。水中に入った煙突から炎と白煙が巻き上がり、やがて水中爆発を起こして艦首から沈没した。

反転した栗田艦隊がやって来た頃には、既に『武蔵』の姿はどこにも見られなかった。大和は波間に漂う妹の残骸を見つけた。それを見た途端、自然と大和の瞳から涙がこぼれた。

愛する妹を失った痛みは、今後、大和の心に深く刻み込まれることになった。

それは死ぬまで癒せない、永遠の傷。

しかしそれが、妹の記憶でもあった。

忘れない。

私は、勇敢に戦い、散っていった妹を決して忘れない

『武蔵』が沈んだ海の上で、大和は息を吸い込んだ。

そして 歌い始める。

それは、かつて妹が自分にせがんでいた、歌。

姉妹二人だけの秘密。

自分の歌声が、妹に届くと信じて、歌詞を紡ぐ。

大和は歌う。

よく頑張ってくれた、妹の安らかな眠りを祈って

六 紅涙（後書き）

本作はこれにて終了となります。

神龍編シリーズの外伝としては久しぶりの作品となりました。今回はかの有名な日本の大戦艦、大和と武蔵を扱った内容となっておりますが、云わば神龍編シリーズの変態司令長官として登場した大和の過去編でもあります。

大和、そして妹の武蔵。彼女たちが生まれた時代が、彼女たちを引き裂く様を描いてみたつもりです。

大和はこの戦い以降、やがて神龍本編の沖縄特攻で自らも朽ち果てるまで、妹の傷を背負い続けてきたと言う事ですね。

相変わらず未熟な部分多々ありのままに仕上がってしまいましたが、最後まで読んでくださった方がいるならば感謝するばかりであります。

また会える日が訪れる事を願っております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1591u/>

戦艦『武蔵』 ～ 姉妹の運命 ～

2011年6月28日18時01分発行